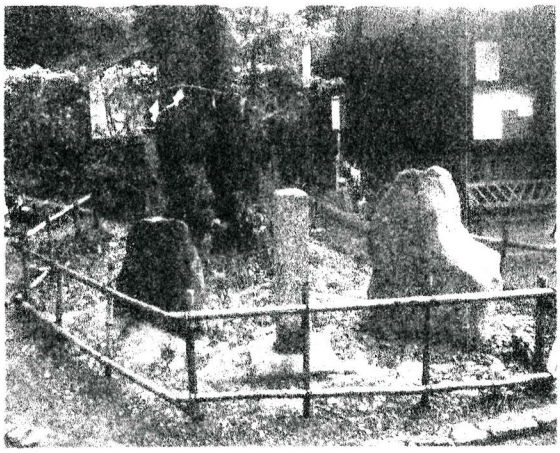
幻住庵保勝会だより

令和３年２月吉日　　保勝会員　３５７名

平成幻住庵の模型　森脇旭一氏　作

コロナ禍のなか皆様のご協力で今年度も終了



左から①句碑(芭蕉翁150回忌記念1843年建立)②椎の木(当時の幼木)③芭蕉翁幻住庵跡の碑（1772年建立）④芭蕉翁経塚の碑（1781年建立）

こんな1年になると誰が予測したでしょうか。
コロナに始まりコロナで終わると高を括っていたのが大間違いで日々拡大の一途を辿り、いつ自分が感染するのかと不安と恐怖の毎日を送っているのは私だけでしょうか。現在は第3波のまっ只中で県下でも一向に収まる気配がありません。私達としては、先ずは自分が感染しないよう常に細心の注意を払って過ごすしかありません。一日も早く感染拡大が治まり平和な日常が戻って来ることを願うばかりです。

そうした中、昨年10月には規模を縮小した形で第86回幻住庵芭蕉祭を実施し、昭和10年からの伝統を守ることができました。これも保勝会員を始め地域の皆さんのご理解･ご協力のお蔭と　心よりお礼申し上げます。

今年こそは、従来のような形で第87回芭蕉祭が盛大に実施できますようお祈りすると共に、皆様方のご支援・ご協力を宜しくお願いいたします。

幻住庵俳句コンクール　投句の状況

番号	県名	投句人数 第101回	第102回	第103回	第104回	投句数 第101回	第102回	第103回	第104回	合計
2	青森									0
11	千葉		1				2			2
12	埼玉		4				8			8
13	東京	5	2	1	1	18	11	10	10	49
14	神奈川	2	1		1	14	6		10	30
18	福井		1				1			1
21	岐阜	2			3	4			5	9
22	静岡		1				2			2
23	愛知	1	2	5	1	2	3	10	4	19
24	三重	2				4				4
25	滋賀	24	27	28	17	144	151	146	123	564
26	和歌山									0
27	京都	6	8	7	2	33	31	25	15	104
28	大阪	7	16	17	12	50	57	51	54	212
29	奈良	4	1			6	2			8
30	兵庫	3	3	1		11	10	2		23
34	広島		1				2			2
40	福岡		1				1			1
	その他			3				3		3
合計		56	69	62	37	286	287	247	221	1041
					254					

年間県内投句数	年間県外投句数
564	474

投句箱設置場所別投句数

投句箱設置場所	投句人数 第101回	第102回	第103回	第104回	投句数 第101回	第102回	第103回	第104回
幻住庵	23	13	14	13	114	82	81	75
JR石山駅	7	16	8	7	31	58	50	49
晴嵐市民センター	13	15	16	12	92	89	66	80
石山寺	13	25	24	5	49	58	50	17
合　計	56	69	62	37	286	287	247	221

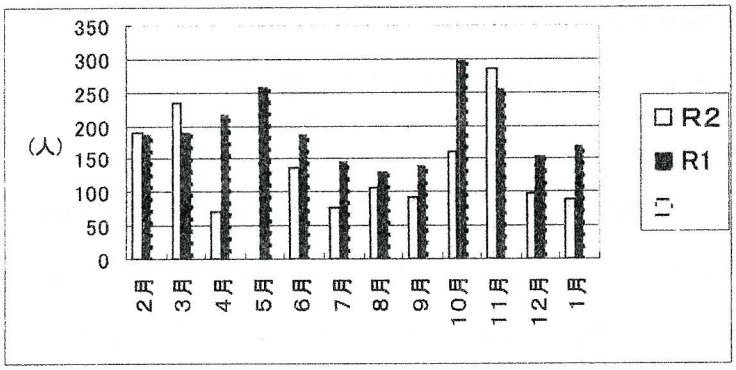
令和元年８月～令和２年７月迄の投句状況は左表の通りです。

年間投句数は全国で 1041（昨年1139）句で、県内の 564 句のうち大津市内 463 句、草津市 44 句,守山市 2 句,栗東市 40 句,野洲,市 6 句,蒲生郡 9 句でした。

全投句者の内、男性 43%、女性 57%でした。

年齢別では 70 歳代が最多で、以下 80 歳代、60 歳代となっており、中でも 90 歳代２名の方が毎回投句して頂いており全く頭の下がる思いです。

幻住庵来庵者の状況



令和２年２月から令和３年１月まで

令和２年２月から令和３年１月までの年間来庵者数は1542(昨年2323)人で昨年比33%減となっています。今年度は何といってもコロナ感染症の影響（4/17～5/31 閉庵）で大幅減となりました。以下は県別来庵者数です。

茨木(1)栃木(1)群馬(1)千葉(1)埼玉(1)東京(11)神奈川(14)石川(1)福井(5)長野(1)岐阜(11)静岡(1) 愛知(14) 三重(7)和歌山(1)京都(71) 大阪(87) 奈良(23) 兵庫(29)岡山(6)香川(2) 愛媛(1)鹿児島(2) 滋賀(1250)

オーストラリア(2)ドイツ(3)アイルランド(2) 中国(1)アメリカ(4)

（文責　陌　間）

—連載—　　近江で詠まれた芭蕉発句の鑑賞

松尾芭蕉（1644~94）
1690年5月～9月幻住庵で過す

少将のあまの咄や志賀の雪

元禄２年、膳所滞在中、乙州の養母智月の住みかを訪ねた時の句。智月は夫に死別してから尼になり、仰木の里に隠棲しました。親子で俳諧をたしなみ、よく芭蕉の世話をしました。後年、大坂で病没した芭蕉は門人たちの手で翌日、大津に入り、乙州邸で沐浴に付され、智月と乙州の妻が縫った浄衣を着せられて義仲の墓の隣に葬られました。［ここまでは、前回の「だより」で掲載済み］

「少将の尼」というのは中宮少将のこと。藤原信実の女で、後堀河天皇の中宮に仕え、晩年尼となって仰木に隠棲しました。かって和歌に名を残した少将の尼が隠れ住み、今は俳諧に志の深い智月尼が住んでいることに興を寄せたのです。昔から花に名を得た志賀の里に、いま雪の降るころ訪ねてきて、しみじみと今昔の話を交わしているのです。「少将の尼をもってきたところに主の智月の境遇を髣髴とさせ、さらに志賀の雪を言うことで、辺りの閑寂なさまを浮き立たせる」と山本健吉は述べています。

何に此師走の市にゆくからす

元禄２年、歳末、膳所での句。一直線に師走の雑踏に向けて飛んでいく烏を、「何にこの」と、責めているようで、「実は初めて年を越す膳所の雑踏の方へ心が動いている自分を省みているのである」「イメージとしては、空を一直線に鳴き過ぎる烏の姿があり、その先には師走の市の雑踏がある。そして、それがまた、作者の心の動く方向、足の向く方向をクローズアップしている。」と山本健吉は述べています。

かくれけり師走の海のかいつぶり

元禄３年、年の瀬に乙州の新宅で越年した時の句のようです。引きこもって湖を見ていると、かいつぶりが水をくぐっている。師走のことで、鳰（かいつぶり）さへせわしげに思われる、の意でしょうか。山本健吉は、「水に潜ったり、あらわれたり、すこぶる忙しい鳰の性質に、師走の本意を見出したのであろう。眼前にあっと思う間に潜って見えなくなった瞬間の軽い驚きを把えたもの。いきなり『かくれけり』と持って来た倒叙法にその驚きが表れている。軽い嘱目の即興句ながら、詩人のウイットの生動した句である」と述べています。

ただし、『句選年考』には「元禄三年幻住庵にての吟歟」とあるようです。『己の光』の「住捨てし幻住庵には如何なる句をか残されけん。それはそれ。さて世の中を承るに、妖（あやし）げながら狐貧しき師走かな　基角」とあって、この句が続いているようです。しかし、芭蕉が幻住庵に滞在したのは春から夏にかけてですから、やはり幻住庵での句ではないでしょう。

（保勝会理事　山田　稔）